

後漢末魏晉時期における弘農楊氏の動向

落 合 悠 紀

要旨 弘農楊氏は後漢時代後半期において大きな影響力を持った一族であった。とくに楊震から楊彪までの4世代にわたっては、宰相である三公に就任したことから、「四世三公」と呼ばれ後漢時代きっての名族とみなされた。彼らが後漢の政治上どのような役割を果たしたのかという点については、すでに多くの先行研究が存在する。しかし、楊彪より後の世代である魏晉時代の楊氏についてはほとんど注目されていない。

一般的に魏晉時代は、貴族と呼ばれる存在が生まれ、勢力を拡大していく時代として理解されている。このような時代背景の中で、旧時代である後漢を代表する存在であった弘農楊氏が、新しい時代の流れの中でどのような行動をとったのかを明らかにすることは、魏晉南北朝時代における貴族社会の形成・発展を考える上で重要なテーマといえる。そこで、本論文では後漢末から魏晉時代にかけて活動した弘農楊氏の一族を対象として、時代ごとの政治状況などをふまえて彼らの動向について考察し、以下のことを明らかにし得た。

弘農楊氏は後漢末の段階で「四世三公」の家として名声を確固たるものとしていたが、戦乱の中で郷里社会との関係は希薄になり、政治的にも目立った実績を残すことがなかった。そのため、曹魏時代には史書にその活動がほとんど記録されないほど影響力が低下することになっていったとみられる。その後、西晋王朝において貴族社会が形成される中で、楊準父子や楊駿兄弟が登場し、時代の変化に向き合うこととなった。しかし、前者は高い名声を得ていたものの実績に乏しかったためそれに見合う地位に就けず、後者は外戚として権力を握ったが貴族社会に受け入れられる名声は得られなかった。貴族という新しい存在が力をもっていく時代の中では、弘農楊氏といえども名族というだけではその流れに乗ることができず、衰退の道を辿ることになったのである。

キーワード：弘農楊氏、楊震、曹魏、西晋、貴族制

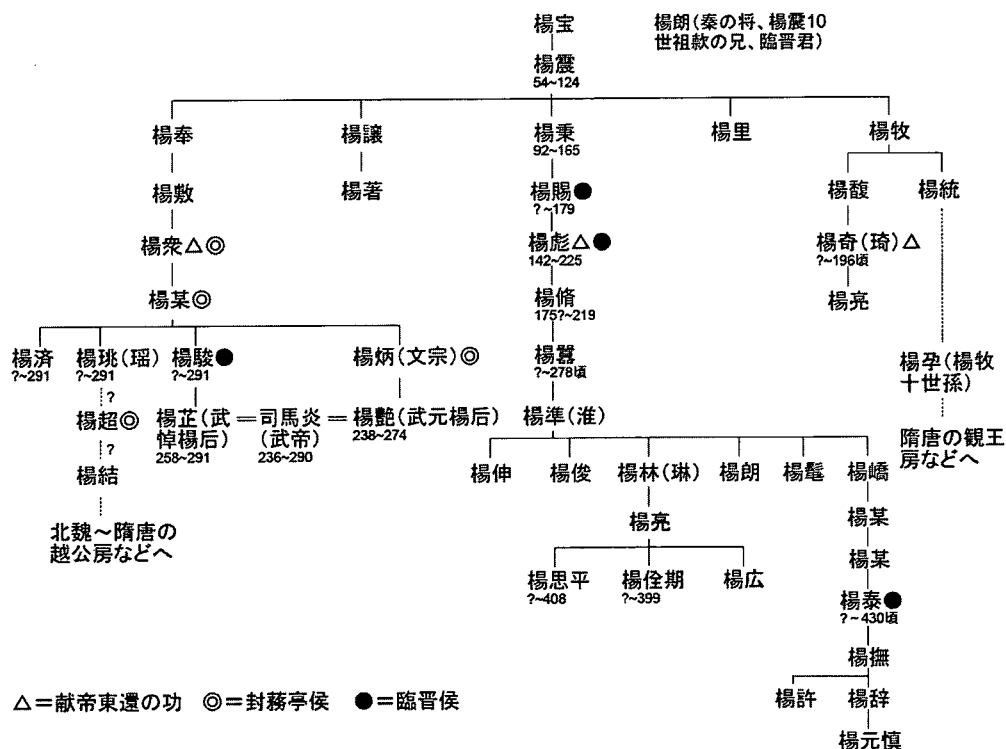
はじめに

後漢時代は地方豪族が大きな力をもち、中央に進出し政権の中枢を担った時代として理解される。なかでも有力な豪族の家では、世々二千石と呼ばれる大臣や地方長官を輩出するように

なり、門生・故吏といった師弟や主従の関係を軸にした人的繋がりと相俟って、門閥化が進んだ。こうして生まれてきた名家・名族中最も有力な家柄とみなされたのが、4世代にわたって宰相たる三公を輩出し「四世三公」と称された汝南の袁氏と弘農の楊氏であった⁽¹⁾。

本稿ではこの弘農楊氏の一族について、彼らがその名族としての地位を確たるものとした後の後漢時代末期から、西晋末永嘉の乱によって中原を追われ勢力を衰えさせていく時期までの動向を中心に検討する。後漢から魏晋南北朝へとという大きな時代の変化に対し、当時の有力な士大夫層がどのような認識をもち、どのように対応しようとしたのか、その一端を知ることができるからである。なお、参考までに本稿で取り上げる後漢から魏晋時期にかけての弘農楊氏の一族についての系図を以下に掲げる。このうち本稿で主に対象とするのは楊奉の系統と楊秉の系統であるが、弘農楊氏の実質的な祖である楊震との関係や封爵の継承関係などを論じる際に適宜参照いただければ幸いである。

この時期の弘農楊氏をめぐる先行研究としては、竹田龍兒氏の「門閥としての弘農楊氏についての一考察」(『史学』31, 1958)が各種史料に見られる楊氏の動向を網羅的に整理しており、弘農楊氏の始祖伝説から北朝時期にかけての楊氏一族全体の概要を把握するのに有益である。ただし、個々の人物についてはあくまで列伝などの史料上の記述を紹介するにとどまり、当該



後漢末~魏晋時期 弘農楊氏系図

時期の政治状況などをふまえて掘り下げた考察するまでには至っていない。とりわけ漢から魏晉へという大きな時代の変化に対し、楊氏一族がどのように動いたのかという点は今後さらなる検討が求められている。

弘農楊氏の実質的な祖とされる後漢中期に活躍した楊震についての研究では、狩野直禎氏の「楊震伝についての一考察」（同氏著『後漢政治史の研究』同朋舎出版、1993所収）が挙げられる。狩野氏は『後漢書』に載せられる楊震の列伝を中心として、丹念にその人物像や政治姿勢を明らかにした。その上で狩野氏は、楊震やその子で父と同じく三公まで昇った楊秉などは、經学の知識を中心とした本人の能力によりその地位を確立したところが大きいという。つまり、楊震・楊秉父子の段階では個人的な資質によって朝廷や士大夫から認められたという面が強く、まだ名族としての弘農楊氏の姿は見られないというのである。とすると、楊氏が名族としての地位を確固たるものとするのは、文字どおり「4世代目の三公就任者」となった楊彪の世代、すなわち後漢末期のことであるといえよう。

ではすでに「四世三公」の家柄として名声を得た後、即ち名族としての弘農楊氏を扱った研究にはどのようなものがあるだろうか。この時期の研究としては、西晋武帝の外戚であった楊駿兄弟を対象としたものがある。権家玉氏の「西晋楊駿一族の崛起」（『魏晉南北朝隋唐史資料』24、2008）と、田中一輝氏の「西晋の東宮と外戚楊氏」（『東洋史研究』68-3、2009）である。権氏は楊駿兄弟が高い地位に就いたのが、娘の楊芷が武帝の皇后に冊立されて以降であることから、弘農楊氏という家柄ではなくあくまで皇帝の外戚という立場によって権力を獲得したと説く。また田中氏は武帝期の東宮官を分析し、暗愚という評判のあった皇太子を支えるために東宮官が重要視されたことと、そこに楊駿兄弟の影響力が強く反映されていることから、武帝の治世末期には楊駿一派が東宮官を押さえることによって政治権力を確保していたことを明らかにされている。

楊駿については、従来史料の不足から上記竹田氏の研究などでは系統不明とされていたが、石井仁氏と渡邊義浩氏による「西晋墓誌二題」（『駒沢史学』66、2006）において近年発見された楊駿の墓誌が取り上げられ、誌文の内容から両氏は楊駿兄弟を楊震以来の楊氏の本流として位置づけられた。しかし、西晋から東晋時期にかけて活躍した楊氏には、つとに竹田氏が指摘しているように、楊震の玄孫でやはり三公となった楊彪の系統も存在する。この系統に関してはこれまであまり取り上げられることがなく、その位置づけについての考察はいまだ十分であるとはいえず、なお検討の余地があるといえる。

また、前漢から西晋時代にかけての弘農楊氏の動向を整理した研究として、何徳章・馬力群両氏による「両漢時代的弘農楊氏」（『魏晉南北朝隋唐史資料』22輯、2005）がある⁽²⁾。何氏らは弘農楊氏の世系について、『新唐書』の宰相世系表に見える前漢初めの楊喜や、前漢中期に丞相となった楊敞らを楊震の直接の祖先として理解する。その上で、弘農楊氏の前漢における

発展と衰退、後漢における再興と名族化、曹魏政権下における衰退といった変遷を時代状況に沿って検討している。何氏らの楊氏の世系に対する理解については、狩野氏が指摘するように楊震の父の世代よりも以前の者との直接的な血縁関係を想定することに疑問が残る。しかし、「四世三公」を輩出する後漢時代についていえば、代々家柄によらず学問を修めたことで評価されてその地位を得たことや、外戚や宦官と交わらずかえってその不正を糾すなどの清廉さをもっていったという指摘は参考にすべきであろう。その上で何氏は、後漢末に権力を握った曹操が、後漢の名族を抑圧しようとした結果、曹魏以降の楊氏の衰退を招いたとしている。

上記の先行研究については、弘農楊氏の家系にканして、日本では狩野氏の説が受け入れられているのに対し、中国側の多くの研究では前漢時代から連綿と続く一族とみなされている点が大きく異なっており注意を要する。しかし、楊震以降の弘農楊氏に対する理解はおおむね納得できるものであり、すでに今日においては通説となっているといつてよい。とりわけ竹田氏や狩野氏、何・馬両氏の各研究によって「四世三公」の弘農楊氏の特質として挙げられた、家柄によらず学問によって身を起こしているということは注目に値する。楊震はともかくとして、子の楊秉以降の世代についても、三公という父祖の任によって官僚となったのではなく、あくまでその本人の儒家的な学問の才能によって認められているのである。また、そうした儒家官僚としての背景をもつことから、当時問題となっていた宦官や外戚一族による不正等に対してはこれを厳しく追及するなど、いわゆる清流派的な活動が見られることも指摘されている。この点において、多数の門生・故吏の存在を背景に政治的影響力を拡大し、後漢末に群雄として割拠した袁紹や袁術を輩出した汝南袁氏とは同じく「四世三公」と称される名族でありながら、大きく異なっていたといえる。

しかしながら、このように弘農楊氏が隆盛していく過程については多くの研究がなされている一方、その後の動向についてはあまり言及されていない。弘農楊氏が後漢きっての名族とされるようになるのは、4世代目の楊彪が三公に就任したことで「四世三公」となったことによる。だがこの楊彪をはじめとした後漢末期の楊氏の活動、すなわち「四世三公」となった後の弘農楊氏の動向やその影響力については、曹魏時代も含めて十分な考察がなされてきたとはいえないのである。本稿ではそうした観点から、あらためて弘農楊氏が「四世三公」としての名声確立した後漢末から、貴族社会の形成に伴い新たな名族が生まれてくる東晋成立期ごろまでを視野に、弘農楊氏と確認できる人物を取り上げる。そして彼らの事跡を整理しながら、弘農楊氏の一族がどのような変遷をたどったのかを追ってみたい。

1 後漢末の弘農楊氏の動向

1-1 献帝の東還に対する功績

すでに先行研究において指摘されてきたように、「四世三公」の楊氏の隆盛は楊震に始まっ

た。しかし、楊震自身はもとより、その子の楊秉も四十代になるまで家学である『歐陽尚書』を修め、『京氏易』に通じ、隠居してそれを教授するという生活を送っており、三公の子として若くして政界に足を踏み入れたというわけではなかった。さらに楊秉の子である楊賜も同様に、門弟への教授に専念し、仕官を求める様子ではなかった。こうしたことから楊氏の一族は、三公を輩出した名門という家柄よりも個々人の儒家としての能力によって評価され、高位に昇ったと理解される。この傾向は、門生・故吏といった人脈や、「四世三公」の家柄という点を利用して、後漢末の混乱期に一大勢力を築いた袁氏一族の袁紹や袁術らとは大きく異なる。それは後漢時代における楊氏の特徴をなした。

では楊氏の者たちが政治に関心がなく学問にのみ専念していたのかといえば、そうではない。楊秉は四十を過ぎた高齢で出仕したにも関わらず、たびたび宦官やその一族の不正を糾弾しており、楊賜もまた、跋扈將軍と呼ばれた外戚梁冀の辟召を断り、党錮事件に連坐して司徒の職を追われるなど、当時のいわゆる清流派と濁流派の対立構造の中に身を置いていた。ただしここで注意したいのは、楊秉も楊賜もいわゆる清流派のように他の儒家官僚と連携して派閥や政治勢力のようなものを形成することはなかったということである。楊賜が党錮に連坐していることや、楊氏の門生・故吏とされる人物も多いことから完全な独行であったわけではないだろうが、やはり袁氏などに比べて個人としての活動が目立つといえよう。

このような楊氏の特徴が色濃くみられるのが、董卓によって長安に遷都を余儀なくされた献帝が、董卓死後の混乱の中、洛陽への帰還を図ったときである。それより前、長安への遷都を強く諫めた人物が、楊賜の子にして楊氏四代目の三公就任者となった楊彪であった。楊彪は董卓の不興を買ってまでも遷都反対を訴え、司徒の任を解かれたが、野に下ることなく献帝に従って長安へ移り、董卓政権下で改めて太尉の職に就いている。また楊震の玄孫で楊彪と同世代にあたる楊奇⁽³⁾と楊衆も⁽⁴⁾、ともに長安への遷都に従っている。彼らもまたそれぞれ衛尉や御史中丞という朝廷の高官であった⁽⁵⁾。これら楊氏の行動はあくまで朝廷を支える姿勢を示したもののといえる。袁紹や袁術らが董卓打倒を掲げて連合軍を形成し、地方に勢力基盤を確立していたのとは対照的である。

董卓が部下の呂布によって暗殺されると、その後は董卓配下の有力な部将であった李傕が長安に攻め上り、献帝を擁することになった。しかし献帝擁立後は、李傕と同僚の郭汜ら他の実力者たちとの勢力争いが生じ、長安一帯が戦場となって混乱した。献帝の洛陽への帰還は、その隙を突いて企図されたのである。このとき、楊氏の3人はそれぞれに功績を上げている。その具体的な行動を見ていくと、まず楊奇については『後漢書』列伝44・楊震伝附楊牧伝に、

及李傕脅帝歸其營，〔楊〕奇与黃門侍郎鍾繇誘傕部曲將宋曄・楊昂令反傕。傕由此孤弱，帝乃得東。

李傕の帝を脅し其の宮に帰せしめんとするに及び、〔楊〕奇は黃門侍郎の鍾繇と与に傕の部曲將の宋曄・楊昂を誘いて傕に反かしむ。傕は此に由りて孤弱たり、帝乃ち東するを得たり。

とある。楊奇は、勢力争いの中で李傕が再び献帝を手中に収めんとした際、鍾繇とともに李傕の部下に謀反を起こさせて混乱を招き、李傕の手を逃れるきっかけを作った。このことで李傕の勢いは弱まり、無事に東の洛陽まで落ち延びることができたとされている。

同じく『後漢書』楊震伝附楊奉伝には楊衆に関して次のようにある。

及帝東還、夜走度河、〔楊〕衆率諸官属歩從至太陽、扈侍中。

帝の東還するに及び、夜に走げて河を度る。〔楊〕衆は諸官属を率いて歩き従いて太陽に至り、侍中を扈す。

長安を脱出した献帝の一行は李傕軍の追撃を受け、途中の弘農郡を通過する際に戦闘となり、敗北して多くの人馬を失っていた⁽⁶⁾。一行は夜陰に乗じて黄河を渡るが、楊衆は付き従う官人たちを統率して太陽という土地まで無事にたどりついたという。この太陽とは地名であり、李賢注には「太陽，県，属河東郡。」とあり河東郡の県名とされるが、『統漢書』郡国志には名前が見えない。『後漢書』の他の記事などから大陽県のことと考えられる。なお、献帝が曹操に迎えられて許に都をおいた後、東還に功のあった者たちを列侯に封じたが、楊奇はすでに亡くなっていたため、楊衆と楊奇の子の楊亮がそれぞれ荊亭侯と陽成亭侯を与えられている。こうしたことから楊奇と楊衆が相応の働きを示したことを想像させる。しかし、史書に記された記述は極めて少ない。とりわけ、二人が功績を上げた時期が東還行の始めと終わりであり、激戦があり最も困難であった弘農通過に際し、その地が楊氏の本貫であるにもかかわらず、具体的な活動が認められない点は興味深い。

では当時太尉であり、弘農楊氏の中でも抜きん出た存在であった楊彪についてはどうだろうか。楊彪は長安からの東還にあたって常に献帝の傍にあり、李傕や郭汜などとの交渉役や行動の方針についての意見を述べるなど、重要な役割を果たしていたことが知れる⁽⁷⁾。ここでその行動一つ一つを取り上げることはしないが、やはり注目されるのは、弘農郡を通過する際の動向である。そのときの楊彪の行動は、『三国志』巻6・董卓伝の裴松之注と『後漢書』列伝62・董卓伝の李賢注所引の袁宏『後漢紀』の記事に見ることができる。両者には若干の文言の違いがあるが、ひとまず裴注のそれに従って確認してみよう。

初、議者欲令天子浮河東下、太尉楊彪曰「臣弘農人、從此已東、有三十六灘、非万乘所当

従也」。

初め、議者天子をして河に浮びて東下せしめんと欲す、太尉楊彪曰く「臣は弘農の人、此れより已東は、三十六の灘有り、万乗（天子）の当に従るべき所に非ざるなり」と。

これによれば、楊彪は地元弘農出身であることから、河を使って船で東へ下るのは難所が多く困難であるということを描している⁽⁸⁾。この進言が採用され、陸路を通ることになるのであるが、その途中の弘農郡華陰県では、献帝を迎えて物資を提供しようとした元董卓配下の將軍段熲を、同じく董卓配下で献帝に協力していた楊定が私怨によって攻撃し⁽⁹⁾、10日以上を浪費する事件があった⁽¹⁰⁾。また同じく弘農郡内の東澗で、献帝一行は追撃してきた李傕・郭汜の連合軍に大敗し、輜重や御物を悉く失い、さらに曹陽亭でも李傕軍の攻撃を受けて、公卿以下多くの犠牲者を出しながらなんとか逃げ延びるはめに陥った⁽¹¹⁾。『後漢書』献帝紀には、「幸華陰、露次道南。（華陰に幸し、道の南に露次す。）」や「幸曹陽、露次田中。（曹陽に幸し、田中に露次す。）」と記述されるように、皇帝すらも屋外で夜を明かすことがあった。この間、水路は危険であると主張した楊震は献帝と共にありながら、具体的な献策や物的な支援をしたというような記録は見当たらない。

すでに4世代にわたって三公を輩出していた楊氏一族には、群雄として地方に割拠した袁氏に比べれば基盤はなかったかもしれないが、門生や故吏といった支持者は多くいたとみられる⁽¹²⁾。その上、本貫の弘農郡が戦場となり、多くの随臣を失い這々の体で落ち延びるほどの悲惨な状況でありながら、援助を行った形跡が見られないことは何とも不思議なことに思える。これにはどのような理由があったのだろうか。そこで注目したいのが、華陰県に駐屯して献帝を奉迎しようとした段熲という人物の存在である。

1-2 後漢末における弘農華陰をめぐる状況

段熲は、董卓が洛陽を放棄して長安に遷都した後、洛陽へ攻め上ってきた諸侯を抑えるために各地に派遣された董卓配下の部将の一人である⁽¹³⁾。このとき段熲が駐屯したのが弘農郡の華陰県、すなわち楊氏の本貫地であった。結局、董卓討伐を目指した諸侯たちは洛陽攻略後引き上げたため華陰が戦場になることはなかったが、段熲はそのまま華陰にとどまり、農業を振興してよく一帯を治めていたようである⁽¹⁴⁾。董卓による長安遷都は初平2年（191）のことであり、献帝が東還するのは興平2年（195）のことであるから、およそ4年ほどの間、華陰一帯は段熲の統治下にあったとみてよい。この間、董卓暗殺を契機に長安では権力争いが繰り広げられるが、華陰の周辺は段熲の存在によって比較的安定を保っていたと考えられる。だがそれは同時に、段熲が長安の政権中枢における政治闘争と距離を置いていたことを示している。当然、段熲の統治下にあった華陰一帯も長安との関係が弱まっていたであろう。そのため常に献

帝の側にいて楊氏の一族でも主要な地位にあった楊彪や楊奇・楊衆らは、郷里の華陰県と緊密な繋がりを保つことは難しくなっていたのではないだろうか。

段熲は献帝の東還に際して楊定と争った後も華陰の支配を続けていたとみられ、曹操が献帝を迎えた後の建安3年（198）には漢中の諸将と共に詔を奉じて李傕を討伐し、その功績によって安南將軍に昇進し、關郷侯に封ぜられている⁽¹⁵⁾。『統漢書』郡国志によるとこの關郷は華陰県に隣接する湖県に属しており、楊震が襲爵していた臨晋県侯や楊衆に与えられた務亭侯などの封地と同様に華陰に近い⁽¹⁶⁾。この封爵は、当時段熲のもっていた当該地域への影響力が反映されたものと考えられる。

なお、段熲のその後についてははっきりしないが、『三国志』巻10・賈詡伝注引『献帝紀』では大鴻臚として中央に召され、建安14年（209）に病死したとある。『後漢書』董卓伝では、建安7年（202）の記事に「後徵段熲為大鴻臚，病卒。（後に段熲を徵して大鴻臚と為さんとするも，病卒す。）」と記しており、大鴻臚就任がこの歳のこととしても長安遷都より10年以上経ている。その間実質的に華陰一帯を支配し大きな混乱なども見られず、近隣の關郷に封侯されていることから、段熲と弘農・華陰の地域社会との間に密接な関係が築かれていたことが想像される。

これに対して楊氏の代表格である楊彪は、洛陽帰還後も献帝の側にあり、曹操による許への遷都にも従うなど中央朝廷での活動がつづいている。むろん楊氏一族全体としてみれば、この期間、弘農郡や華陰県などの地方に残って活動する楊氏の系統はいたであろう。ただ楊彪や楊奇・楊衆といった朝廷に仕える楊氏の者は、郷里社会との距離がますます遠のいていたと考えられる。弘農楊氏はそうした状況下で魏王朝の成立を迎えるのである。

2 曹魏時代の弘農楊氏の動向

2-1 楊彪・楊修父子と曹操

献帝の一行は李傕らの追っ手を逃れた後、いったん洛陽に入ったが、さらにその後曹操に迎えられて許に都を遷すことになった。その際、楊彪は太尉として献帝と共に許へ移ったが、直後に病気を理由に太尉の官を退いている。楊奇・楊衆も付き従っていたかどうかについては、列伝に記述がなくはっきりしない⁽¹⁷⁾。この経緯については、『後漢書』列伝44・楊震伝附楊彪伝では、曹操との確執がその背景にあったことが記されている。

時天子新遷，大会公卿，兗州刺史曹操上殿，見彪色不悦，恐於此囚之，未得讞設，託疾如廁，因出還宮。彪以疾罷。

時に天子新たに遷り，大いに公卿を会す，兗州刺史曹操殿に上り，彪の色の悦ばざるを見，此において之を囚らんとするを恐れ，未だ讞設するを得ずして，疾に託して廁に如き，因

りて出でて營に還る。彪は疾を以て罷める。

このとき、理由は示されていないが、曹操が上殿したことに對して楊彪が良い顔をしなかったようである。そこで不穏な空気を察した曹操は、宴の始まらないうちに病氣を理由に陣營に引き上げている。そしてその後に楊彪が病氣を理由に官を退いた記事が続く。詳細は不明だが、楊彪と曹操とは互いに含むところがあるかのような記述であることからみて、楊彪の病氣というのは、これに託けて曹操と距離を置くための方便であったのではないか。あるいは曹操の側から圧力をかけた可能性も考えられる。いずれにせよ、楊彪と曹操との間に確執があったことは間違いあるまい。

楊彪伝ではこの記事に続けて、次のような事件を載せる。

時袁術僭亂。操託彪与術婚姻，誣以欲図廢置，奏取下獄，劾以大逆。

時に袁術僭亂す。操は彪の術と婚姻するに託し、誣して以て廢置を図らんと欲すとし、奏して収めて獄に下し、劾するに大逆を以てせんとす。

曹操は、楊彪が天子を僭稱した袁術との婚姻関係にあることを理由に⁽¹⁸⁾、謀反を図っていると誣告して、大逆の罪で処罰しようとしたのである。このときは孔融が反対したため事なきを得たが、曹操の行動からは、楊彪への強い警戒心をうかがうことができる。それにはどのような理由があるのだろうか。史料上にはそのことを示すような記述はないため想像するより他ないが、考えられるのはやはり弘農楊氏がもつ有形無形の影響力であろう。当時曹操は獻帝を擁したことで群雄たちに比べて大きな影響力を有していたが、純粋な軍事力や経済力では北方に割拠した袁紹に劣っており、また皇帝を僭稱した袁術との抗争も続いていた。

その後楊彪は建安4年（199）に太常を拜し、建安10年（205）までその職に留まるが、すでに政治の実権は曹操派に握られていた。「四世三公」たる楊彪に祭祀などの儀礼を司らせることで後漢王朝を尊重する立場を示しつつも、事実上政治の表舞台から遠ざけた人事といえよう。さらに建安11年（206）には、本人の功績によって封爵されたのではなく、父祖から継承していた者の爵位をすべて返上させるという措置がとられた。楊彪伝には次による。

十一年，諸以恩沢為侯者皆奪封。

十一年，諸もろの恩沢を以て侯と為る者は皆な封を奪う。

これにより楊震も、父楊賜が靈帝の師父を務めたことで得た臨晉侯の爵を失っている。この措置は、父祖による漢王朝に対する功績が認められなくなったことを意味しているといえ、楊

震はいよいよ漢の命運が尽きようとしていることを察して表に出なくなったという。

こうした中で才覚を現したのが楊彪の子の楊修であった。高祖父の楊震から父の楊彪まで4世代にわたって三公を輩出した楊氏のなかでも本流とも言うべき家に生まれた楊修は、『後漢書』楊震伝附楊修伝に引かれる『典略』によれば、

修、建安中挙孝廉、除郎中。丞相請署倉曹属主簿。是時軍国多事、修総知内外事、皆称意。修は建安中に孝廉に挙げられ、郎中に除さる。丞相は請いて倉曹に署して主簿に属かしむ。是の時軍国事多く、修は内外の事を総知し、皆な意に称う。

とあり、建安年間に孝廉に挙げられ、建安12年(207)に曹操が丞相となるとその主簿となって重用されたという。しかし次第に曹操から疎まれるようになり、罪を着せられて処刑されてしまった。処刑時の年齢について楊修伝の李賢注に引かれる司馬彪『統漢書』によれば、「故遂收殺之、時年四十五矣(故に遂に収めて之を殺す、時に年四十五なり。)」とある。『三国志』巻19・陳思王植伝の裴注所引『世語』では、25歳で曹操に用いられたとあって、建安24年(219)の漢中遠征後に処刑されたことから考えると、楊修が仕官したのは献帝が洛陽に帰還し曹操の庇護を受けて以降のことと理解できる。曹操と楊彪の間に確執が生まれた時期との関係は不明であるが、当時はまだ袁紹・袁術らとの対立が続いていたことからして、「四世三公」の名族である楊氏の存在に一定の配慮をしていたという見方もできるのではなかろうか。

何徳章氏はこうした曹操による楊彪父子への対応を、後漢的な勢力の復興を抑えるためであったと理解する。確かにそのような曹操の政策が反映された側面はあるだろう。しかしながら、楊彪と曹操との関係では、脈絡なく唐突に確執が生じたかのような書かれ方をしており、不自然さは拭えない。楊彪については、献帝を奉迎した直後から曹操に警戒され、袁術との婚姻を理由に処罰されそうになったわけだが、例えば建安5年(200)に献帝東還の最大の功労者であった車騎將軍董承による曹操排除のクーデター計画が発覚した際には、これに託けて楊彪も処罰しようとしたような形跡はない。楊修にしてもその最期はともかく、20年近く曹操に仕えて側近の地位にあったのであり、当初から曹操に楊氏を抑圧する意図があったとみることは難しいだろう。むしろ楊彪がその後長く祭祀を司る太常に就任していたことや、楊修が曹操の側にあったことなどからは、曹操が後漢の名族である楊氏を尊重しようとする姿勢が見て取れる。しかしその後袁氏を破り、魏王に封ぜられるなど禪譲を視野に入れるに段階に至って、旧時代たる後漢の名族との関係を重視する必要が薄くなった。その結果として楊彪が父から継承した臨晋侯の爵を剥奪したり、楊修を処刑したりということに繋がったと考えられる。

曹操の死後、曹丕が献帝から禪譲を受けて即位すると、隠居していた楊彪に対し再び太尉となることを要請している。しかし楊彪は、

彪備漢三公，遭世傾亂，不能有所補益。耄年被病，豈可贊惟新之朝。

彪は漢の三公に備わるも、世の傾亂に遭い、能く補益する所有らず。耄年にして病を被り、豈に惟新の朝に賛すべけんや⁽¹⁹⁾。

の述べて、後漢王朝の宰相となりながら、補政の任を果たすことができなかったのに、どうして新王朝に貢献できようかと固辞している。結局曹丕も三公への登用は断念し、恩典を与えて尊重するに留めた。このことについて、『三国志』巻2・文帝紀の裴注所引『統漢書』では「如孔光故事」としており、前漢末の孔光になぞらえて老年であっても優れた人物を尊重する姿勢を示したといえる。だが孔光の故事は、王莽によって士大夫層の不満を抑えるために担ぎ上げられたという面もある。すると曹丕の意図というのは、後漢の名族としての楊彪を優遇することで、後漢に忠誠を誓っていた者たちの不満を和らげようとしたことにあるのだろう。そして楊彪は黄初6年（225）に84歳という高齢で没するが、これ以降曹魏王朝下での弘農楊氏の活動は全くと言ってよいほど見られなくなってしまうのである。

2-2 楊艶と司馬炎の婚姻

楊彪の死後、わずかに史料の合間からうかがい知られる曹魏時代における楊氏の活動は、後に西晋の武帝となる司馬炎とその皇后となる楊艶との婚姻である。

『晋書』巻31・武元楊皇后伝によると、楊艶は幼いころから聡明であり、人相見から将来富貴になると予言されていた。それを聞いた司馬昭は、世子の司馬炎の妻として娶ったとされている。その婚姻の時期は、司馬炎の生まれが青龍4年（236）、楊艶が景初2年（238）ということがわかっており、二人の間に生まれた長子の司馬軌は2歳で夭折し生年が不明なものの、後に恵帝となる司馬衷は甘露4年（259）に生まれているため、250年代半ばあたりと考えられる。この間の曹魏での出来事を見てみると、嘉平6年（254）皇帝曹芳が廃位され、高貴郷公曹髦が即位し、翌正元2年（255）には病を押して母丘儉の反乱を討伐した司馬師が亡くなり司馬昭が後継となっている。また、甘露3年（258）には司馬昭に九錫が下賜されるがこれを辞退するという、禅譲に向けた形式的な手続きも始まっている。こうした情勢下で、司馬昭は自らの跡継ぎとなる司馬炎のために、弘農楊氏の娘を娶っているのである。

ところで、この楊艶とその父楊文宗とは弘農楊氏の中でどのような立場にあったのであろうか。『晋書』巻93・外戚楊文宗伝の記述は極めて簡潔で、

楊文宗，武元皇后父也。其先事漢，四世為三公。文宗為魏通事郎，襲封務亭侯。早卒，以后父，追贈車騎將軍，諡曰穆。

楊文宗，武元皇后の父なり。其の先は漢に事え、四世三公と為る。文宗は魏の通事郎と為

り、蒨亭侯を襲封す。早くに卒し、後の父を以て、車騎將軍を追贈され、諡して穆と曰う。

とあるのみであるが、この蒨亭侯という爵は、献帝の東還に功績のあった楊衆が封ぜられたものである。これに加えて、石井仁氏と渡邊義浩氏が紹介した「楊駿墓誌」の記述などから、楊文宗と楊駿ら兄弟の祖父が楊衆であったことが確認され、そのことから石井氏らは楊文宗の兄弟を楊氏の本流に繋がる存在と位置づけている⁽²⁰⁾。確かに楊文宗兄弟は楊震の五世孫に当たるわけであるが、その父の名前は史書になく、墓誌でもちょうどその個所は削れていてわからない。楊震の末子の楊奉やその子楊敷も若くして亡くなったらしく業績がなく、楊秉－楊賜－楊彪と三代にわたり三公を輩出し続けた系統と比べ、見劣りする感は拭えない。しかし、楊修が曹操によって処刑された後、その子とされる楊囂の名は西晋時代になるまで見られず⁽²¹⁾、曹魏時代の楊氏においては、楊奉～楊文宗の系統が重きをなしていたとも考えられる。いずれにせよ史料上の裏付けはなく、推測の域を出ないところではあるが、司馬昭が弘農楊氏の政治家として、あるいは名族としての影響力などを期待して婚姻関係を結んだと理解するのは早計であろう。むしろ曹魏政権下で凋落していた後漢の象徴たる「四世三公」の一族を、曹魏からの権力奪取を進める司馬氏は重要視しているのだ、とアピールする狙いがあったのではないと思われる。おそらく楊文宗が通事郎（中書侍郎）となったのも、司馬氏との婚姻後のことであろう。

なお司馬昭の妻で司馬炎の生母でもある王元姬は、曹魏の重鎮王朗の孫にあたり、経学者として名高い王肅の娘であるが⁽²²⁾、王朗が若いときに当時太尉であった楊賜に師事していたことと⁽²³⁾、王朗の妻で王肅を生んだ女性が楊氏であったという点は司馬氏と楊氏の関係を考える上で注目に値する⁽²⁴⁾。さらに王朗については、即位直後の文帝曹丕に対して楊彪を推挙した人物でもある⁽²⁵⁾。王朗は優れた才能を示した孫の王元姬を可愛がり、王元姬の方も12歳で祖父を失うと自然と哭泣したというから、あるいはこうした祖父の影響を受けて、楊氏の一族に特別な思い入れがあり、息子の嫁選びに助言をすることがあったのかもしれない。

このように見てくると、曹魏時代における弘農楊氏の動向は、曹操執政期における曹操と楊彪との確執や楊修の処刑などにより衰退した前期と、司馬氏との姻戚関係により再び政治の表舞台に登場してくる後期とに明確に分けられる。とりわけ前期が曹魏王朝成立以前のことであるのに対し、後期が曹魏王朝下とはいえずすでに皇帝の実権が失われて司馬氏が台頭していた時期ということは興味深い。楊修が処刑された後、文帝曹丕の代になって楊彪は三公就任を求められたものの固辞しており、以後楊氏は政治の表舞台から姿を消している。続く明帝曹叡や、齊王曹芳の後見として実権を握った曹爽らと楊氏一族との接点は全く見られないことからしても、弘農楊氏と宗室の曹氏との関係が良くないものであったことをうかがわせる。さらに政治と距離を置く期間が長くなったことにより、楊氏の影響力が低下していたことも想像されよう。

3 西晋時代の弘農楊氏の動向

3-1 外戚としての弘農楊氏

司馬炎と楊艶との婚姻の結果、西晋が成立すると弘農楊氏は一躍外戚という立場を獲得することになる。すでに後漢時代の政治的混乱の一因が外戚に求められていたこともあり、曹魏文帝期には外戚の政治参加を抑制する詔が出されるなど、そのあり方は後漢時代の外戚と同質ではなかったが、それでもとくに曹魏後半期に司馬氏が明帝の皇后であった郭太后を後ろ盾としたことなどもあり、政治的影響力を行使しうる有力な存在であることに変わりはない⁽²⁶⁾。

楊艶の父楊文宗は早くに亡くなっていたが、その弟である楊駿・楊珧・楊濟はどうやら楊文宗とは20近い年齢差があったようであり、むしろ姪である楊艶やその夫の司馬炎と近い年齢であったと考えられる。楊駿兄弟の生年は不明であるが、楊駿の娘で楊艶の従妹にあたる楊芷の生年は甘露3年(258)であることから、景初2年(238)生まれの楊艶とは20歳の年齢差があり、楊文宗と楊駿との差も相応にあったとみてよいだろう。こうしたことから、楊駿らは西晋の成立時にはまだ若く、要職に就くことはなかったものと思われる。

楊駿兄弟の活動が目立つようになるのは泰始10年(274)に皇后楊艶が崩じ、彼女の遺言もあって咸寧2年(276)に新たな皇后として従妹の楊芷が立てられたことによる。この前年の咸寧元年(275)には楊駿の弟楊珧が太子詹事となって東宮に入り⁽²⁷⁾、これ以降長きにわたって東宮官の地位に在り続けている⁽²⁸⁾。また末弟の楊濟も、咸寧5年(279)の征呉の役にあって行冠軍将軍に任じられ、総司令官である賈充の副将の地位を与えられている⁽²⁹⁾。后父である楊駿自身は、咸寧2年(276)の立后時は鎮軍将軍の地位にあったが、同年中に臨晋侯に封ぜられ、その後車騎将軍に昇進している⁽³⁰⁾。

これ以後、外戚として影響力を増して「三楊」と称されるようになる楊駿兄弟については、権家玉氏や田中一輝氏の先行研究で詳しく考察されており、ここでは取り上げないが、一点従来あまり注目されていなかったことを指摘しておきたい。それは楊駿に与えられた臨晋侯という爵位のことである。西晋時代においては公侯伯子男のいわゆる五等爵制が施行されたことはよく知られているが、ここで注目すべきは「臨晋」という地名である。臨晋県は西晋時代馮翊郡に属した実在する県名であり、ここを封地とすること自体に問題はない。しかし、『晋書』巻40・楊駿伝では臨晋侯に封ぜられた記事に続けて次のように記す。

識者議之曰「夫封建諸侯，所以藩屏王室也。后妃，所以供粢盛，弘内教也。后父始封而以臨晋為侯，兆於乱矣」。尚書褚碧・郭奕並表駿小器，不可以任社稷之重。武帝不從。

識者之を議して曰く「夫れ諸侯を封建するは，王室を藩屏する所以なり。后妃は粢盛を供し，内教を弘むる所以なり。后の父は始めて封ぜられ臨晋を以て侯と為る，乱を兆すなり」

と。尚書褚碧・郭奕は並びに駿の小器にして、以て社稷の重きを任すべからざると表す。武帝従わず。

ここでは識者の意見として臨晋という名が「晋に臨む」という意味であることから、やがて晋という国そのものを脅かすことになるかと指摘されている。さらに尚書の褚碧や郭奕は、楊駿が大任を委ねられる人物ではないとして重用に反対したが、武帝はこれらの意見を退けて楊駿兄弟への信任を深めていったのである。

何故武帝は反対意見があったにも関わらず、臨晋侯に封じることこだわったのであろうか。重任に堪えるかどうかという個人の資質はともかく、封地であれば同程度の格の他の土地に変えるなど、融通をきかせても問題ないように思われる。不吉とされた「臨晋」の地に敢えて封じたことには、何か理由があるのではないか。

そこで思い起こされるのが、建安年間に楊彪が奪われた爵位が臨晋侯であったことである。またそれは、楊彪の父楊賜が霊帝の師父であったことから、楊氏一族として初めて封建された爵位でもあった。即ち三代目と四代目の三公就任者が臨晋侯に封ぜられていたのである。献帝東遷の功績によって、同じ楊氏の楊亮と楊衆がそれぞれ陽成亭侯と莒亭侯に封ぜられているが、これに対し臨晋侯は県侯という一段高い爵位であったことからしても⁽³¹⁾、「四世三公」の家である弘農楊氏を象徴する爵位であったとみてよいのではないか。そして武帝はそうのように考えたからこそ、臨晋侯という楊氏にとって重要な意味を持つ爵位を再び与えることとしたのだと思われる。

これにより楊駿は、兄の楊文宗が襲爵していた莒亭侯ではなく楊賜―楊彪の爵位を継承したことになり、彼らの後を嗣ぐ者であるというある種のお墨付きを与えられたことになる。詳しくは後述するが、楊彪の子の楊修には、楊囂という息子がいた。しかし、咸寧4年(278)ごろにはすでに亡くなっていたようであり、そこで楊駿こそが三公を輩出し続けた弘農楊氏の本流を継ぐ者であるということを示す意図があったと考えれば、武帝の態度も納得がいくのである。

さらに西晋よりかなり時代が下って北魏時代のこととなるが、明元帝の治世(409～423)に劉宋から亡命してきた楊泰という人物に対し、明元帝が臨晋侯に封じたという記事が、『洛陽伽藍記』の中に見える⁽³²⁾。未だ華北統一前で漢人貴族の登用もあまり進んでいない段階でのことである。おそらくこの封爵も、亡命者である楊泰を漢人の名族として尊重するという意味を込めたものであったのではないか。

なお、そもそも楊賜がなぜ臨晋県に封ぜられたのかについては史書に説明はない。しかし、一つ関連が想起されることとして、楊震の十世祖とされる楊款の兄の楊朗という人物の存在が考えられる。『新唐書』宰相世系表の楊氏世系によれば、彼は秦の将となり臨晋君に封ぜられ、

その子孫は馮翊に居住したとされている。もともと春秋時代に晋の大夫であった楊氏の一族は、祁盈の与党として晋を追われて華山のふもとに逃れたが、移住後に初めて封侯された人物が楊朗である。その後、前漢時代には項羽を討った楊喜が赤泉侯に、丞相となった楊賜が安平侯にそれぞれ封ぜられているが、赤泉県は汝南郡、安平県は涿郡に属しており、弘農とはかけ離れた土地である。楊震と楊朗・楊款兄弟との間が世系表のように繋がるかははっきりしないが、楊氏にとって郷里である弘農華陰にほど近い臨晋の名は、一族のいわば原点たる重みを有していたと考えられる。楊賜への臨晋侯賜与の背景にはこのような事情があったのではないか。

このように楊文宗の娘の楊艶が司馬炎に嫁いだことをきっかけとして、一躍脚光を浴びることになった楊駿兄弟たちは、武帝からの信任を背景に、東宮官を中心に楊氏の一族や姻戚関係にある者たちを配して権力基盤を確保し、武帝の治世末年には政治の実権を握ることに成功した。郷里社会との関係が希薄化し、献帝の東遷にあたっては個人レベルを超える活動を見せることのなかった後漢時代に比べ、姻戚や故吏といった繋がりを駆使して派閥を形成し、一大政治勢力を形成するさまは、もともと学者の家系として個人の資質によって認められてきた楊氏一族が、時代の変化にあわせて大きく変貌してきたことをうかがわせる⁽³³⁾。しかし武帝の死後、楊艶の子である司馬衷が恵帝として即位すると、引き続き外戚として権力を維持しようとした楊駿らに対し、皇后となった賈南風らがクーデターを起こし、楊駿の一族は捕らえられて処刑され、弘農楊氏による権力掌握はあっけない幕切れを迎えてしまう⁽³⁴⁾。楊駿の個人的な資質の問題もあるだろうが、張華や衛瑾らの有力官僚や宗室の汝南王司馬亮らと楊駿の間に対立が生じており、彼らが賈后に協力したことなどからすると、楊氏中心の政権が広く輿論の支持を得られなかったことが楊氏政権崩壊の一因となったといえる。すでに後漢から曹魏を経て西晋となっていた時代にあって、「四世三公」の一族であるということは、それだけで人びとの支持を集める要素とはなり得なかったのである。

3-2 後漢以来の伝統を受け継いだ弘農楊氏

西晋時代の弘農楊氏に関しては、とかく外戚たる楊駿兄弟が注目されるところであるが、楊彪―楊修の系統も活躍している。まず楊修の子の楊囂であるが、この人物に関わる記述については、少ないながらも留意すべき点が多い。そもそも2章において触れたように⁽³⁵⁾、史書に楊囂の名前が見えるのは西晋時代に入ってからであるのだが、父の楊修は漢魏革命の直前である建安24年(219)に45歳で処刑されたとされており、泰始元年(265)の西晋成立までは50年近くの開きがある。かりに楊修の晩年の子であったとしても、泰始初年には40代後半ということになるのだが、『世語』では若くして亡くなったとされている。さらに楊囂の子の楊準について『世説新語』賞誉篇の劉孝標注に引かれる『冀州記』に、成都王司馬穎の死(306年)後まもなく27歳で没したと記されており、上記の計算と合わせて考えると、楊準は280年ご

ろに父楊囂が若くても 60 代で生まれたということになる。だが楊囂は咸寧 4 年（278）の武帝の詔ですでに故人とされていた⁽³⁶⁾。こうした矛盾については、曹魏王朝の成立後楊氏一族が政治の表舞台から姿を消したのと合わせ、何らかの背景が存在しているのではないかと疑わせるが、史料がなく現状ではこれ以上の検討はできない。

また、楊囂が就いたとされる典軍將軍という職についても、『晋書』の職官志をはじめとして史書に記述がなく、具体的な地位や職掌などについてはよくわからない⁽³⁷⁾。唯一楊囂の活動として確認できるのは、『晋書』巻・40 賈充伝に、

又以東南有事，遣典軍將軍楊囂宣諭，使六旬還内。

又た東南に事有るを以て，典軍將軍楊囂を遣わして宣諭せしめ，六旬して内に還らしむ。

とある記事のみである。年月の記載のないこの出来事がいつの時期なのか確認するために直前の記事を見てみると、賈充が裴秀に代わって尚書令となったとある。賈充の尚書令就任は泰始 4 年（268）のことであるから、楊囂が派遣されたのは泰始 5 年（269）ごろのことであろう。この時期の東南での事件というと、268 年に孫呉の皇帝孫皓が自ら軍を率いて東関に出陣したことが挙げられる。このとき、西晋側の対呉戦線を統括していた大司馬石苞が、呉の將軍丁奉の計略により謀反の疑いがかけられ都に召還されており⁽³⁸⁾、西晋の前線は大きく動揺していた。楊囂の派遣はこれを鎮撫する目的があったのではないか。

そうであれば、楊囂は石苞不在の前線の動揺を抑えられるだけの名望と地位を備えていたと考えられる⁽³⁹⁾。『三国志』裴注所引の『世語』に「心膂之任」とあって武帝から腹心と頼られていたというの⁽⁴⁰⁾、あながち誇張ではないかもしれない。先に指摘したように、楊囂の年齢については疑問もあるが、もう少し長生きをしていれば、あるいは楊駿に代わる存在となり得た可能性もあったと思われる。それは裏を返せば、「四世三公」の系譜を受け継ぐ楊囂の死によって、西晋における弘農楊氏の影響力や存在感といったものが低下したともいえ、武帝をして楊駿への臨晋公賜与を強行させたような、楊氏への権威付けがなされたといえる。

楊囂の子楊準は、史料が少ないが、残されたわずかな記述の中から名族として期待されていたことがうかがえる。すなわち『三国志』巻 19・陳思王植伝の裴注所引『冀州記』は次のように記している⁽⁴¹⁾。

準見王綱不振，遂縱酒，不以官事為意，逍遙卒歲而已。成都王知準不治，猶以其為名士，惜而不責，召以為軍謀祭酒。府散停家，關東諸侯議欲以準補三事，以示懷賢尚德之舉。事未施行而卒。

準は王綱の振わざるを見，遂に酒を縦にし，官事を以て意と為さず，逍遙として歳を卒え

るのみ。成都王は準の治まらざるを知るも、猶お其の名士為るを以て、惜しみて責めず、召して以て軍謀祭酒と為す。府散じて家に停まるや、関東の諸侯議して準を以て三事に補し、以て賢を懷い徳を尚ぶの挙を示さんと欲す。事未だ施行されずして卒す。

これによれば、楊準は西晋末の混乱にあって、酒におぼれて政治を顧みなかったが、それでも成都王の司馬穎は楊準が名士であることから処罰せず、軍師として自らの下に召し抱えていたという。さらに成都王が殺されその府が解散した後も、関東すなわち都の洛陽にいた諸侯たちは、楊準を三公⁽⁴²⁾として迎えようとしたが、まもなく亡くなった。

これは貴族化へと向かっていた西晋の士大夫社会において、楊準が高く評価されていたことを示す記事である。酒におぼれていたということも、西晋末の政治状況や、竹林の七賢に代表されるような隠逸的思想の流行などから考えると、政治への絶望感からのものであったのだろう。また『三国志』巻21・王粲伝附阮瑀伝注引『晋諸侯贊』には、

〔嵇〕紹與子簡・弘農楊準同好友善，而紹最有忠正之情。

〔嵇〕紹は〔山濤の〕子の簡・弘農の楊準と同一友善を好み，而して紹最も忠正の情有り。

とあって、楊準が嵇康の子の嵇紹と山濤の子の山簡と「同好」で親しく付き合っていたという記事がある。嵇康と山濤はいずれも竹林の七賢に数えられる人物であり、その子らと好むところが同じだったということは、楊準もまた隠逸的な性向をもっていたと思われる。

さらに前掲の『冀州記』では、楊準の記事に続けて、準の子の楊嶠と楊髦の二人が、準の友人であった裴頠と楽広の二人からそれぞれ評価されたエピソードを紹介し、また楊嶠の弟の楊俊が兄弟では最も清廉であったと記している。

準子嶠字国彦，髦字士彦，並為後出之俊。準与裴頠・楽広善，遣往見之。頠性弘方，愛嶠之有高韻，謂準曰「嶠当及卿，然髦小減也」。広性清淳，愛髦之有神檢，謂準曰「嶠自及卿，然髦尤精出」。準歎曰「我二兒之優劣，乃裴・楽之優劣也」。評者以為嶠雖有高韻，而神檢不逮，広言為得。傳暢云「嶠似準而疎」。嶠弟俊，字惠彦，最清出。嶠・髦皆為二千石。俊，太傅掾。

準の子の嶠字は国彦，髦字は士彦，並びに後出の俊と為る。準は裴頠・楽広と善く，往きて之に見えしむ。頠の性は弘方にして，嶠の高韻有るを愛し，準に謂いて曰く「嶠は当に卿に及ぶべし，然れども髦は小や減ずるなり」と。広の性は清淳なれば，髦の神檢有るを愛し，準に謂いて曰く「嶠は自ずから卿に及ぶも，然るに髦は尤も精出たり」と。準は歎じて曰く「我が二兒の優劣は，乃ち裴・楽の優劣なり」と。評者以為く嶠は高韻有ると雖

も、神検は逮ばず、広の言得と為す。傳暢云く「嶠は準に似るも疎たり」と。嶠の弟俊、字は恵彦、最も清出たり。嶠・髦は皆な二千石と為り。俊は太傅掾となる。

裴頠は西晋建国の功臣裴秀の子で王戎や王衍と親交があり、王戎の娘を娶った人物である。楽広もまた王衍や裴楷、衛瓘らと清談をよくし、娘の一人は成都王司馬穎の妃となっている。こうした人物との交遊があったことから、楊準が当時名の知れた人物であったことがうかがえよう。当然、裴頠や楽広から目をかけられた楊嶠と楊髦の兄弟も、次代を担う人材として周囲からの期待は高かったと思われる。

楊嶠らの逸話については、ほぼ同じ内容が『世説新語』品藻篇にも採録されている。『世説新語』には、他にも楊準の息子の楊朗についてのエピソードが載せられており、賞誉篇には二つの話が収められている。一つめは次のようなものである。

世目楊朗「沈審経断」。蔡司徒云「若使中朝不乱，楊氏作公方未已」。謝公云「朗是大才」。世は楊朗を「沈審経断」と目す。蔡司徒云く「若し中朝をして乱れざらしむれば，楊氏の公作ること方に未だ已まざらん」と。謝公云く「朗は是れ大才なり」と。

これは楊朗についての評価を記したものであるが、文中に登場する蔡司徒とは東晋の蔡謨のこと、謝公とは謝安のことである。とくに謝安は南朝において琅邪王氏と並ぶ名門貴族とされた陽夏謝氏の礎を築いた人物であり、彼から大才として評価された意義は大きい。また評価の内容から見ると、蔡謨の発言も興味深い。蔡謨は、もし西晋が乱れることがなければ、今も楊氏から三公を輩出することが続いていたとしているのである。この発言からは、当時楊朗が「四世三公」の後裔であると士大夫間で認められており、三公への就任が期待されていたことが知られる。それに加えて「若使中朝不乱」という表現からは、西晋末の混乱によって楊氏もまた大きな影響を被り、政治的な影響力を大きく減退させたことがうかがえる。

賞誉篇に収められたもう一つの記事は、楊朗と琅邪王氏との関係を示すものである。

王大將軍与丞相書，称楊朗曰「世彦識器理致，才隱明断。既為国器，且是楊侯准之子。位望絶為陵遲，卿亦足与之处」。

王大將軍は丞相に書を与えて、楊朗を称して曰く「世彦は識器理致，才隱明断為り。既に国器と為り，且つ是楊侯准の子なり。位望^{はなは}絶だ陵遲為れば，卿も亦た之と処るに足る」と。

王大將軍とは王敦のこと、丞相とは王敦の従弟の王導のことで、ともに東晋建国に多大な功績

を残し、琅邪王氏を南朝最大の名門貴族に押し上げた人物である。その王敦が王導に、楊朗（世彦は楊朗の字）の才能を褒める手紙を出している。それによれば、楊朗はすでに国を代表する人材（国器）となった上に、楊準（淮は準の誤り）の子であるが、ただ官位や名望が衰えて（陵遲）きてしまったために、王導であっても対等に付き合っているに過ぎないと評価している。

ここで楊朗本人の資質に加え、父が楊準であることを引き合いに出していることから、西晋における楊準の名望の高さがうかがえる。しかし、より注意すべきは最後の一文である。「位望絶為陵遲」というのは、まさに当時の弘農楊氏の置かれた状況を的確に表現しているのではないだろうか。三公を連続して輩出した後漢末の頃に比べて衰えてきたというだけでなく、一時的にせよ政治の実権を握った楊駿らが誅殺されたことや、先の蔡謨の発言に見られるような西晋末の混乱によって楊氏の勢力が衰退したこともふまえた発言と理解できる。

上記賞誉篇の二つの記事は、いずれも東晋を代表する有力者たちがこぞって楊朗を評価したことを記している。しかし実態として、楊朗が貴族社会の中でその才能や家柄に相応しい扱いを受けていたのかという点については、むしろ疑問が残ったといえる。楊朗については他に『世説新語』識鑑篇で、はじめ王敦の部下であり、王敦が敗れた後明帝に殺されそうになるが、明帝の崩御によって難を逃れたこと、後に三公を兼ねて多くの無名の人材を見出したことなどが記されている。ただし、『晋書』等の他の史料には楊朗の名は確認できない。当時の三公は宰相としての役割が後漢時代に比べて低く、名誉職的な性格が強かったため特筆すべきことがなかったであろう。そうであるならば、楊朗の政治的な影響力というのも、士大夫間の評判ほどには大きくなかったと考えられる。

以上に見てきたことから、楊朗の年齢に一部疑問が残るものの、「四世三公」の直系ともいふべき楊彪―楊修の系統は、西晋時代から東晋の初期、当時を代表する士大夫・貴族層との交友関係をもっていたことが確認できた。外戚という地位を背景に台頭した楊駿兄弟とは別に、楊準父子らは、当時形成されつつあった貴族社会の一員として受け入れられていたといえる。しかしその一方で、楊準や楊朗に見られるように、高い名声を得つつも具体的な活動や実績には乏しいという実態もあった。その背景には『世説新語』で語られるように、西晋末の政治的混乱や戦乱による影響で活躍の機会を得られなかったことが考えられよう。

このように高い名声を得ていながら、それに見合う十分な実績を上げられなかった姿というのは、後漢末の献帝東還行に付き従いながら大きな役割を果たすことのなかった楊彪らのそれと重なる。弘農楊氏の置かれたこうした状況にあって、名族としての新たな姿を目指したのが、楊駿兄弟たちであったのではないだろうか。楊駿の台頭期には西晋末の混乱はまだ起きていないが、すでに見たように曹魏時代を通じて弘農楊氏の活動は低調であった。そのなかで楊駿は、前時代の名族に過ぎない弘農楊氏という出自ではなく、外戚という立場を積極的に利用して権

力を握ることに成功したのである。しかし、家柄や名声を重視しないその政治姿勢は、まさに生まれつつあった貴族たちの価値観とは相容れないものであり、彼らとの対立を生じさせることとなった。武帝は楊駿を臨晋侯に封ずることで「四世三公」の本流を継ぐ者として認め、箔付けを図ろうとしていたが、その武帝の庇護がなくなると楊駿は失脚し、結局楊駿の一族が貴族化することはなかったのである。

4 東晋における弘農楊氏 ― おわりに代えて ―

最後に、東晋にわたった弘農楊氏について、その後の動きを簡単に追って、後漢屈指の名族が江南に成立した貴族社会にどのように関わっていったのかを確認してみたい。

東晋後半期に活躍した武人に楊佺期という人物がおり、『晋書』巻84・楊佺期伝ではその出自を次のように記している。

楊佺期、弘農華陰人、漢太尉震之後也。曾祖準，太常。自震至準，七世有名徳。祖林，少有才望，値乱没胡。父亮，少仕偽朝，後帰国，終於梁州刺史，以貞幹知名。

楊佺期は弘農華陰の人、漢の太尉震の後なり。曾祖の準，太常たり。震自り準に至るまで、七世名徳有り。祖の林，少くして才望有るも，乱に値りて胡に没す。父の亮，少くして偽朝に仕え，後に国に帰し，梁州刺史に終わる。貞幹を以て名を知る。

これによれば楊佺期の曾祖父は楊準で、楊準の子の楊林は永嘉の乱などの戦乱に巻き込まれて胡族政権の成立した華北に取り残されたようである。その息子の楊亮は最初異民族の王朝に仕えていたが、のち東晋に帰順して梁州刺史となって亡くなった。このように東晋の建国から遅れて南遷してきたという事情から、楊佺期の一族に対する評価は低いものだったようである。それについて楊佺期伝に以下のようにある。

佺期沈勇果勁，而兄広及弟思平等皆強獷粗暴。自云門戸承籍，江表莫比。有以其門地比王珣者，猶恚恨。而時人以其晩過江，婚宦失類，毎排抑之。恒慷慨切齒，欲因事際以逞其志。佺期は沈勇にして果勁，而るに兄の広及び弟の思平らは皆な強獷にして粗暴たり。自ら云う門戸承籍すること，江表比する莫しと。其の門地を以て王珣に比する者有らば，猶お恚恨す。而るに時人其の晩く江を過ぎ，婚宦は類を失うを以て，毎に之を排抑す。恒に慷慨切齒して，事際に因りて其の志を逞しくせんと欲す。

楊佺期の兄弟は自分たちの楊氏という家柄について、後漢以来の名族であるという強い自負を抱いていたことがうかがえる。それは東晋建国の功臣王導の孫にあたり、名門琅邪王氏を代表

する王珣と比較する者ですら恨みに思うほどであった。しかしそうした当人の思いとは裏腹に、「時人」からは南遷が遅く官職や婚姻関係が名門貴族に相応しいものではないと見られ、貴族社会から排斥されたため、常に不満を抱き機会を窺っていたという⁽⁴³⁾。

楊朗などの他の楊準の息子たちの系統については不明であるが、少なくともこの楊俊期の置かれた境遇からは、江南の地で新しい社会が生まれる中、「弘農楊氏」という名前だけではすでに名族として扱われなくなっていた現実を見ることができる。さらに、「沈勇果勁」や「強獷粗暴」であったと記される楊俊期兄弟の性質は、代々家学を伝えて教授していたとされる後漢時代の楊氏や、黄老思想や清談に通じていた楊準のような西晋時代の楊氏とは異なり、むしろ西晋の外戚楊駿に近い存在といえる。そして楊駿の場合は外戚という立場と武帝からの信頼が後ろ盾となっていたが、楊俊期らにはそのようなものがなかった。そうした不安定な立場が、より強く自分たちの出自を意識させることに繋がったとも考えられよう。

楊俊期は殷仲堪に従い桓玄との戦いに敗れて死ぬことになるが、これは隆安3年(399)のことであった⁽⁴⁴⁾。「四世三公」の四代目楊彪が曹操との確執の中で太尉を辞したのが建安元年(196)のことであり、およそ200年経っていることになる。この間に時代は曹魏・西晋を経て南北朝期に入っており、政治的・社会的に大きく変化していた。しかし弘農楊氏に対する評価は、「四世三公」の家という後漢時代に得た名声を越えることがなく、新時代の主役たる貴族へと生まれ変わることは叶わなかったといえる。楊準の一族は高い評価を受けながらも積極的な政治への関与を行わず、東晋成立過程において重要な役割を果たすことがなく、楊駿兄弟は権力の掌握過程において士大夫層との対立を深めた結果、失脚を招いた。この二つの一族の対照的なあり方から見てくるのは、貴族社会に受け入れられていくために、輿論の支持と政治的な活動の両者が欠かせないものであったということである。それに加えて、二つの一族に共通することとして郷里社会との関係の希薄さもうかがえる。南北朝期の貴族の特徴として、王朝の交代を越えて繁栄が続けたことが挙げられるが、貴族というものが登場してくる過程においては、弘農楊氏のように前時代に高い名声を得た一族であっても、その名声によって自然と貴族として認められたわけではないことが理解できよう。そのため「四世三公」の後裔として尊重された楊準の系統も、やがて楊俊期の世代になると、家門に対する強い自負を抱きながらも、周囲の貴族社会からは認められなくなっていったのである。

なお、本稿では全体としての弘農楊氏の動向や変遷を追うことを主眼としたため、個々の人物について掘り下げた考察を行うことはできなかった。一部の人物についてはすでに先行研究において詳細な考察が為されているが、とりわけ交遊・姻戚関係については西晋時期を中心にまだ十分に把握されていない面もあり、今後の課題としたい。

注

- (1) 趙翼『廿二史劄記』巻5・四世三公条参照。なお、楊氏は三公の中でも筆頭の太尉を四世代にわたって輩出したことから『後漢書』伝44・楊震伝においては「四世太尉」と称されている。
- (2) 何徳章氏は本論文をもとに同氏著『魏晉南北朝史叢稿』（商務院書館，2010年11月）に「漢代的弘農楊氏」という論文を載せているが、論旨はほぼ同じである。
- (3) 楊震の長子楊牧の曾孫にあたる。系図参照。
- (4) 楊震の末子楊奉の曾孫にあたる。系図参照。
- (5) 『後漢書』楊震伝附伝による。
- (6) 『三国志』巻6・董卓伝および『後漢書』列伝62・董卓伝など。
- (7) 注(6)所掲董卓伝を参照。
- (8) なお、『後漢書』ではこの記事を、弘農に入ってから李傕らに破れて黄河を渡って北へ逃れようとする場面の注釈としてつけている。この場合、その後実際に黄河を渡っているが、船に乗れず多くの者が落伍したことが記されている。
- (9) 楊定という人物は楊姓ではあるが、董卓の配下であったとされており、おそらく涼州など西方の出身ではないかと考えられる。涼州地方の楊氏では、軍閥を率いて後に曹操に仕えた楊秋という人物が知られている。
- (10) 『後漢書』董卓伝に、

初、楊定与煨有隙，遂誣煨欲反，乃攻其营。

初め、楊定は〔段〕煨と隙有り，遂に煨を誣して反かんと欲するとし，乃ち其の营を攻む。

とある。
- (11) 同じく『後漢書』の董卓伝の記述による。『三国志』には段煨と楊定の戦闘の記事はなく、李傕・郭汜軍との戦いで大敗した記事はあるが、東澗という地名は見られず、『後漢書』ではその後に記されている曹陽亭での戦いとまとめられている。
- (12) 洪适が撰した『隸釈』には楊震とその孫にあたる楊統・楊馥・楊著の碑が収められているが、そこには多数の門生や故吏とみられる人名が記されている。
- (13) 『後漢書』董卓伝。
- (14) 『後漢書』董卓伝注引『典略』に「煨在華陰，特修農事。（煨は華陰に在り，特に農事を修む。）」とある。
- (15) 『後漢書』董卓伝に、

三年，使謁者僕射裴茂詔関中諸將段煨等討李傕，夷三族。以段煨為安南將軍，封関郷侯。

三年，謁者僕射裴茂をして漢中の諸將段煨等に詔して李傕を討たしめ，夷三族たり。段煨を以て安南將軍と為し，関郷侯に封ず。

とあることによる。
- (16) 務郷については史書に記述が無く、位置の特定が困難であるが、『統漢書』郡国志には弘農県に務郷という地名が見える。楊亮が封ぜられた陽成亭については手がかりがないが、『後漢書』楊震伝附楊奇伝の李賢注には楊亮の旧宅が唐代の関郷縣西南に存在するとしており、この付近であったものと思われる。
- (17) 『後漢書』董卓伝の注に引かれる袁宏『後漢紀』には、東遷に功績のあった者13人を封侯したという記事があるが、そこでは楊衆の官職を東郡太守としており、洛陽に到着前後に任じられたのであろう。また、13人の中に楊奇が含まれていないが、これは既にこの時点で楊奇が没しており、後に子の楊亮が封侯されたものと考えられる。
- (18) 『後漢書』帝紀9・献帝紀によれば、許への遷都が建安元年（196）8月、楊彪の罷免が同9月、袁術の天子自称が翌年春のこととして記されている。なお、袁術との姻戚関係は、子の楊修が袁術の甥であったとされることから、袁術の姉か妹を楊彪が娶っていたと考えられる。

- (19) 『後漢書』列伝 44・楊震伝附楊修伝。
- (20) 石井・渡邊前掲論文参照。
- (21) 『三国志』巻 19・陳思王植伝注引『世語』に「鬻，泰始初為典軍將軍，受心膂之任，早卒。（鬻，泰始の初めに典軍將軍と為り，心膂の任を受くるも，早くに卒す。）」とある。
- (22) 『晋書』巻 31・文明王皇后伝。
- (23) 『三国志』巻 13・王朗伝。
- (24) 『晋書』文明王皇后伝には，王皇后の死後「外曾祖母故司徒王朗夫人楊氏」に封爵を追贈する詔が載せられている。
- (25) 『三国志』王朗伝。
- (26) 田中氏前掲論文および下倉渉「散騎省の成立——曹魏・西晋における外戚について——」（『歴史』86, 1996），安田二郎「西晋武帝好色攷」（『東北大東洋史論集』7, 1998，後に同氏著『六朝政治史の研究』京都大学出版会，2003 所収）を参照。
- (27) 『晋書』巻 3・武帝紀，咸寧元年条。
- (28) この時期の東宮官就任の意義については田中前掲論文を参照。
- (29) 『晋書』武帝紀，咸寧 5 年条。
- (30) 『晋書』武帝紀，咸寧 2 年条および同巻 70・楊駿伝。
- (31) 『後漢書』伝 10・皇妃伝の李賢注に「漢法，大県侯視三公。（漢の法は，大県侯は三公に視う。）」「郷・亭侯視中二千石。（郷・亭侯は中二千石に視う。）」とあり，県侯と亭侯の違いがわかる。
- (32) 『洛陽伽藍記』巻 2・景寧寺の条に，楊元慎という人物の記事がある。
 元慎弘農人，晋冀州刺史嶠六世孫。曾祖泰從宋武入関。為上洛太守。七年背偽來朝。明帝賜爵臨晋侯。
 元慎は弘農の人，晋の冀州刺史嶠の六世孫たり。曾祖の泰は宋武に従い入関し，上洛太守と為る。七年して偽に背きて來朝す。明帝は爵臨晋侯を賜う。
 これによると，楊泰は楊修の曾孫楊嶠のさらに曾孫にあたり，楊震の 10 世孫となる人物である。東晋に仕えて劉裕の北伐に従って入関し，上洛太守として留まっていた。それから 7 年後，おそらく東晋から劉宋への革命か，劉裕の崩御などを機に北魏に亡命したとみられる。文中に明帝とされるのは，当該時期から北魏の明元帝のこととみてよいだろう。
- (33) 『晋書』楊駿伝には，家学を修め經書に通じていたといった後漢時代の楊氏に特徴的な記述は見られなくなっている。
- (34) なお『晋書』楊駿伝によれば，永寧年間（301～302）の初め，おそらく賈后が齊王司馬冏や趙王司馬倫らによって自殺に追い込まれたことにともない，楊氏の名譽回復が図られている。このとき務亭侯の楊超という人物を奉朝請・騎都尉に任じて楊氏の後継者としているのだが，楊駿ら三兄弟は「夷族」となっていることや，務亭侯という爵位からは，この楊超は早くに没した楊文宗との繋がりが想起される。しかしながら北魏以降に記される弘農楊氏の墓誌などでは，その出自を楊珣（瑤）の後裔とするものが少なくない。この点については，漢末魏晉時代の弘農楊氏と北朝から隋唐時代の弘農楊氏との関係を考える上でも興味深く，今後の課題といえる。
- (35) 注(21)参照。
- (36) 『晋書』巻 44・盧欽伝に，
 咸寧四年卒，…（中略）…復下詔曰「故司空王基，衛將軍盧欽，領典軍將軍楊囂，並素清貧，身沒之後，居無私積。頃者饑饉，聞其家大匱，其各賜穀三百斛」
 咸寧四年卒す，…（中略）…復た詔を下して曰く「故の司空王基・衛將軍盧欽・典軍將軍楊囂は，並びに素より清貧にして，身没するの後，居に私積無し。頃者饑饉あり，其の家の大匱なるを聞く，其れ各おの穀三百斛を賜う」と。
 とあって，楊囂は咸寧 4 年に卒した盧欽よりも以前に亡くなっていたとみられる。
- (37) 『晋書』巻 59・汝南王亮伝によれば，司馬亮の子の司馬矩が死後典軍將軍を追贈されている。

- (38) 『三国志』巻48・孫皓伝および巻55・丁奉伝。
- (39) なお、『世説新語』賞誉篇に引かれる『世語』では楊囂の官職について典軍校尉としているが、典軍校尉という官職も晋代には見られない。『世語』か『晋書』のいずれかの誤りと考えられるが、ここでは『晋書』中の武帝の詔勅文にも記される典軍將軍を正しいものとして理解しておきたい。
- (40) 注(21)参照。
- (41) 『世説新語』賞誉篇に引かれる『冀州記』もほぼ同じ文章であるが、末尾の「未施行而卒」の後に「時年二十有七矣」とある。
- (42) 「補三事」とは天地人の三つのことを補佐するという意味であり、三公の職務を指す。
- (43) 楊佺期兄弟については竹田氏の先行研究に詳しい。
- (44) 弟の楊思平は一旦逃れて劉裕の桓玄討伐後に復権するが、従弟の楊尚保とともに後に罪を得て処刑され、『晋書』楊佺期伝ではこれをもって「楊氏遂滅」と記している。

The Trends of the Yang Clan of Hongnong during the Late Han, Wei and Jin Periods

OCHIAI Hiroki

When members of the Yang clan of Hongnong had become chancellors, Sangong, for four generations from Yang Zhen down to Yang Biao, the family was given the name of “Sisi Sangong” and regarded as a representative of good families in the Eastern Han dynasty. With its significant power and influence how the Yang clan of Hongnong engaged in Eastern Han politics — many of existing studies have well dealt with this point. However, when it comes to the family after Yang Biao, during the Wei and Jin dynasties, few can be found.

Development of the aristocracy was seen throughout Wei, Jin and Nan-bei-chao and was already afoot in the Wei and Jin dynasties: the aristocracy arose and extended its power. How was the Yang clan of Hongnong symbolic of Eastern Han, or the preceding regime overwhelmed by this current of the times? Through the study of family members who lived during the late Han, Wei and Jin dynasties, considering political situations of each period, the following was elucidated.

While the Yang clan of Hongnong had built up a solid reputation as “Sisi Sangong” by the end of Eastern Han, few of their actions were chronicled during the Cao Wei dynasty. This was caused by the loss of its influence as a result of both failure to achieve noteworthy political deeds and estrangement of the family from its hometown due to the maelstrom of wars. In the wake of the formation of the aristocracy during the subsequent Western Jin dynasty, the Yang clan were driven to face the vicissitudes of the times. In spite of being renowned, Yang Zhun and his son did not hold positions that corresponded to their fame for want of achievements. Yang Zun and his brother, conversely, did not gain eminence sufficient to join the aristocracy despite their authority as cognates. As a new age of the ascending aristocracy had arrived, even the Yang clan of Hongnong, which once had prestige, came to be in its twilight.

Keywords: the Yang clan of Hongnong, Yang Zhen, Cao Wei, Western Jin, aristocracy